篠島における若者宿と民俗慣行

崔杉昌*

〈目 次〉

1. はじめに
2. 調査地としての篠島の生活環境
3. 篠島の社会組織
4. 篠島の若者と宿
5. おわりに

【国文抄録】

본고는 일본 아이치현 미카와만(湾)의 섬 시노지마에서 실시한 필드워크를 바탕으로 섬에서 성행하고 있는 '와카노모야도'라는 민속 관행에 대해 고찰한 것이다. 중학을 졸업한 친구(와카모노)들이 그룹을 형성하여 섬 안의 특정한 집의 방 한칸을 제공받아 숙소인 '야도(宿)'로 삼아 유대를 다지며 형제와 같은 일생의 친구가 되는 '호우바이(朋輩)'를 만드는 것이다. 이를 '와카모노야도'라고 하는데'야도'의 멤버를 '야도코(宿子)'라 하고 야도코를 받아들인 집 주인을 '아도오야(宿親)'라고 부른다. 야도코는 야도오야를 친부모처럼 따르고, 야도오야는 책임감을 가지고 인성적인 지도와 각종 상담등을 통해 야도코의 성장을 돕는다. 야도오야는 기본적으

* 京都府立大学 文学部

로 무보수의 봉사를 한다. 야도코의 최대의 즐거움은 섬 처녀들의 집을 방문하여 평생의 반려자를 찾는 것이다. 이를 '무스메아소비'라 한다. 야도는 25세를 전후해서 결혼을 계기로 자연 해산을 한다. 야도를 해산하더라도 야도오야와의 관계, 호우바이의 관계는 일생을 통해 지속되며, 상호간의 도움을 필요로 하는 섬 생활에 있어서 없어서는 안 될 사회적 시스템으로 기능하고 있다. 오늘날 이지메나 자살, 학교 폭력 등의 청소년 문제를 생각할 때 와카모노야도의 관행은 시사하는 바가 많다고 할 수 있겠다.

主題語: 와카모노, 야도, 야도코, 야도오야, 호우바이, 무스메아소비

1. はじめに

民俗社会には、子どもから大人まで一定の年齢を組織原理として形成されたさまざまな集団が多く存在する。伝統的な民俗行事を担うために結成された子供組、また村落内の若い衆・若連中などといわれる若者組、壮年や老人などが関わる集団も多く見られる。その中で、特に本稿は、島社会という特殊な生活環境にスポットを当て、島に生きる若者の暮らしと民俗慣行を取り上げる。具体的な事例として、篠島に暮らす若者と、彼らによって営まれている若者宿の慣行について、実態報告と考察を試みることにする。

日本における青年男子の集団は、ムラの制度として組織された若者組と、気の合った同年齢の者が集まる若者仲間の二つに分けられが[1]、本稿で扱う若者宿に関する事例は後者に該当するものであ

1) 福田アジオ 他編、『精選 日本民俗学辞典』、東京：吉川弘文館、2006、p. 607.

る。篠島には、中学校を卒業した若者が仲間とともに、寝泊まりする場所が存在する。それを島では若者宿というが、寝泊まりする若者宿は独立した建造物ではなく、若者仲間が依頼した特定の家の一間である。島内でも人望のあり、経済面で余裕のある家に頼み、家の主人を宿親として、自分たちは宿子として擬制的親子関係を結び、保護してもらうとともに指導と監督を受ける。毎晩宿に集まった若者たちはそこで遊び、また夜遊びに出かけたりした。特に島の娘たちのいるところへ出かけて、交流するのが大きな楽しみであった。若者宿を拠点としての娘たちとの交流から、恋愛関係が形成され、結婚相手が決まることも多かった。

このような若者たちの寝泊まりする若者宿は西南日本に偏った分布を示し、その主体は若者組ではなく、あくまでも若者仲間であった。こうした若者宿をめぐる慣行は篠島以外にも、かつては伊勢湾の神島や答志島などにも存在したことがわかる。

筆者は2007年1月下旬、愛知県史編さん室民俗部会の調査員として篠島を訪れ、若者宿に関する民俗調査に参加しており、その一環として伊勢湾の島々にもフィールド・ワークを行う機会を得た。本稿では、このような調査研究を基に、若者宿が島社会でどのように機能し、運営されているのか。また若者宿を生み出した島の社会環境を分析し、宿のもつ現代的な意味合いを探ってみたい。また、今後の近隣諸国との比較研究の足がかりになることも期待する。

2．調査地としての篠島の生活環境

三河湾に浮かぶ篠島は、行政的には愛知県知多郡南知多町に属し、日間賀島と佐久島とともに愛知三島と呼ばれている。三重県伊勢にも近く、古代より海上交通の要衝であった。そのため、伊勢

国・三河国・尾張国と所属が転々としていた。いつの時代にも、篠島からは常に海産物が重要な調貢品として記録され、古くから漁業が盛んであった地域として知られる。昔から伊勢神宮との関わりは深かったようで[2]、この島から御幣鯛(おんべだい)を神宮に奉納するならわしは、今でも古式豊かに続けられている。[3]

周囲６㎞の面積を有する篠島の人口は、1950年頃がもっとも多い時期で、およそ3，800人、670世帯であった。しかしその後は減少を続けて2010年の国勢調査では人口1，763人、634世帯で、人口は1950年当時の半分を下回っている。大半は老人世帯という過疎化が進んだ地域で、典型的な島嶼社会の様子を呈している。

篠島に行くには、船を利用することになるが、島に入るルートにはいくつかがある。まず、知多半島の河和か師崎の港から高速船に乗るのが一般的である。名古屋から列車を利用する場合、名鉄河和線の終着駅にあたるのが河和である。特急に乗ると名古屋から河和まで40分で到着する。駅から港へは歩いて3分程度であるが、駅と港を結ぶシャトルバスも出ている。河和から篠島に渡る定期高速船は一日11便あり、所要時間は30分程度である。

一方、知多半島の南端に位置する師崎へは列車が延びていないため、車を利用するしかない。車で南知多道路を南下して港にたどり着く。師崎港からは、目の前に篠島の姿が見渡せ、島内の建物が判別できるほどの距離である。港から篠島との距離は4㎞と最も近い。船に乗るとわずか10分で到着する。師崎港と篠島を結ぶ定期船は朝7時から午後5時まで一日36便もあり、島民にとっては、このルートが

---

2) 地元にある神明神社の由緒によれば、20年ごとに行われる伊勢神宮の遷宮の際に、その古材の下賜をうけて、神明神社の遷宮も繰り返してきたと、記されている。

3) 篠島の中手島は神宮の御料地で、島で水揚げされた鯛を調製する干鯛調製所、乾燥場、貯蔵庫の施設が置かれている。この鯛は御弊鯛といわれ神の食事、御神饌として捧げられる。現在奉納される鯛の数は508尾である。

陸に渡るもっとも便利かつ短距離の交通手段として重宝されている。そのため、篠島から師崎港の位置する南知多町内まで通勤圏となっており、実際に通勤している人もいるという。また、師埼からはカーフェリーも出ているが、車とともに島に渡ったとしても、島内では外周道路以外は四輪車の通行が禁止されているので、師埼港にある駐車場に車を置いて島に入らなければならない。島内にある車両は運搬用の軽トラックや狭い路地を行き来するオートバイ(原付)である。しかし実際に多くの島民は軽トラック以外の乗用車を所有しており、定期船の本土側寄港地である師崎に駐車しておき、陸に上がったときに利用するという。

このように鉄道を利用するか自動車に乗ってくるかによって島への入り方は変わってくる。観光などで島外の人が島を訪れる場合には、乗り継ぎの便などを考えると河和経由が一般的であるといえる。

篠島港の桟橋をおりてみると、意外にも平地が目につく。道路も正方形に通っており、道路幅も車が通れるぐらい広い。ここは島の人が俗に、「五万坪」と呼んでいる埋立地で、島の北側にあった城山と沖の中手島との間を埋め立てた土地である。この土地はまったくの平地なので、区画が広く、旧島内とくらべて家も広く建てられている。

篠島では何らかの形で漁業関連の仕事に従事する人の比率が高く、今も活況を呈している。一方で民宿業が盛んで、夏の海水浴シーズンには名古屋方面の人々によって島はごった返すという。現在、篠島で盛んな漁はシラス漁であるが、ほかにもエビ・シャコ・アナゴなどが湾内で獲れる魚である[4]。また前述のように、伊勢神宮との関係で鯛漁も、この島を語るに欠かせない漁の一つである。

---

4) 愛知県史編さん委員会編、『愛知県史』別冊 総説民俗1、名古屋：愛知県、2011、pp. 311-312.

3. 篠島の社会組織

1) 自治組織と役員

篠島は近世以来篠島村とし独立してきたが、1961年に南知多町と合併し、今日に至っている。篠島内は、元来は一つの区であったが、1968年に東・中・西・南の4区制となり、その後に新たに開発された八王子区を加えて、5区制となった。この中で、中区は1977年に海の埋め立てで新たに作られた「浦磯」と、東区の一部を含んでできた地域である。各区は11から18の隣組に分かれ、それぞれの組には組長がおかれている。組長の任期は１年で、基本的には輪番制となっている。また隣組の構成戸は固定しているので、転居しても以前からの家々とのつき合いは変わらない。なお一つの隣組を構成する家数は、数戸から20戸程度、平均で約10戸ぐらいであるという。

1998年4月に区議会員の制度ができるまでは、区ごとに組長が集まって区長を選んでいたという。その場合、組長が区長になることはまずなかった。また、当時の区長は任期が明確ではなかったので、何年間も区長を務めた人もいた。当時の区長は長老的な役割であったといわれている。

区会議員制度がスタートした1998年には全体で18名の区会議員を選ぶことが定められた。その内訳は、東区は５名、中区は3名、西区は3名、南区は4名、八王子区は3名である。また区会議員を設けたときに、議員は65歳未満とするというルールが作られた。

現在区長を選ぶ際には、まず区ごとに区議会員の選挙を行い、区議会員の中から区長を選ぶ。さらに選ばれた5人の区長の中から区長代表と副代表を選ぶことになっている。区長は、以前は名誉職的な意味合いもあったが、今日は面倒な役職というイメージが定着しており、誰も区長になりたがらない傾向があるという。なお1998年以

降は、区長は一期務めると2年間は休むという制度が定められ、以前のように何年間も区長を継続的に務めるということはなくなった。

篠島における区長のもっとも大きな役割は、区内の家々の間で生じるもめ事の処理と、家ごとに等級を定めることであるといわれている。特に土地の領有権や買収などに際して、区長が調停や仲裁役を務めることが多いようだ。これは、狭く限られた土地にへばり付くように軒を接して多くの家々が建てられている島嶼社会ならではの役割だといえるだろう。

篠島では、今日でも家々の等級制が生きている。すなわち、町内会費である区費の金額はそれぞれの家の財産や収入、また家族構成などによって異なる。具体的にみると、70歳以上の老人の一人世帯が最も安くて月300円、老人二人世帯が500円、さらに800円、1000円、1300円と徐々に上がり、上位では、旅館を経営する家と２０畳以上の部屋を有する民宿を経営する家は月4500円とされている。このような家ごとの等級は区長が中心となって定めているが、２年に一度は見直しが行われている。

2) 隣組とトナリ

隣組は、近世の五人組や明治期の衛生班などに端を発し、戦時中に隣保班として法的に再編された近隣組織である。戦後の制度改革によって一旦は解散となるが、実際にはそれ以降も地域社会における最末端の近隣組織として、「班」などの名称も残っている。戦時中の隣保班は、屋根葺きや葬式における手伝いなどを目的とした相互扶助のための組織であったので、戦後もその機能を保ちながら今日に至っているケースも多くみられる。したがって隣組の構成戸は、先述したように基本的には固定され、転居によって再構成される家集団ではない。

篠島では1941年ごろに隣組が作られたといわれているが、このような行政主導によって組織された隣組とは別に、それ以前から「トナリ」と呼ばれる家相互の相互扶助を目的とした近隣組織が存在した。これは自然発生的な近隣組織で、おおむね2，3軒から数軒で構成された私的な家関係である。ゆえに、「トナリ」としてつき合う戸数やつき合いの濃度などは家ごとに異なる。隣組は固定した家集団で構成されているが、トナリは家ごとに異なり、家単位で構成されるわけではない。いわば私的な家関係ということになる。ゆえに、トナリであっても別の隣組に入っている場合もある。またトナリの関係は、転居によって切れてしまう場合もあれば、転居後も以前と同様に親しくつき合いを続けるケースもあり、それぞれの家の事情によってまちまちである。この私的な家関係であるトナリと、元来公的な性格を有した隣組の機能は、ある部分では重なり、またある部分では区別されているというが、実際にはかなりの重複が見られ、そこへ親戚の関係が被さって、島内のつき合い関係はきわめて複雑な様相を呈している。

基本的に、出産祝いを除いた冠婚葬祭や家の新築、舟の新造などは隣組が関わりあう機会とされている。葬式は別として、お祝い事では隣組に属する家からは祝い品を贈ることになっており、その祝い返しがかつては砂糖と寿司であったという[5]。また葬式では通夜と葬式当日と、後の七日ごとに行われる法要にも出かけていって食事作りなどの裏方の手伝いを担う。また葬儀における「善の綱」[6]を持つのは隣組の役割とされている。葬式では、隣組とトナリの他に、当然ながら親戚や後述する宿関係の人たちも手伝いに来るので、非常に複雑な相互扶助関係の家々が絡み合うことになる。しか

---

5) 愛知県史編さん専門委員会民俗部会編、『愛知県史民俗調査報告書』 1篠島、名古屋：愛知県総務部県史編さん室、1998、p. 96.

6) 葬式のとき、棺に結びつけられ、関係者が握って進む白布の綱のこと。

し実際は、自然に役割分担ができることも多いといわれている。

トナリとしてのつき合いは、すでに述べたように隣組同士のつき合いを基本として、出産やその他の個人的な祝いことが加わる。しかしトナリとのつき合い方は家によってかなり異なり、一様に習慣化されているわけではない。非常に親しいつき合いを続けている例もあれば、家が隣接しているがゆえに諍いがおこり、疎遠になってしまうような例もあるという。

3) 青年団と消防団

戦前の篠島では、数え15，6歳で青年団に入団し、数え25歳で退団した。その当時は、25歳以前に結婚しても青年団を脱退することはなかったという。入団時には団長から団員としての心得を厳しく教えられた。当時の青年団長は以前に青年団を退いた、おおむね40歳ほどの者が務めていた。それは、青年団員は若いだけに血気が盛んなので、あまり年齢の変わらない年上者ではうまく統率ができなかったからだといわれている。青年団長は資産家で、島の内外の多くの人たちに顔が利き、かつ人望のある有力者が務めていたという。

『知多半島篠島 補遺』によれば、明治期には青年団は「消防組」と称せられ、水難救済・火災予防・山林保護・風紀矯正・祭典奉仕といった役割を担っていたことが記されている。また同書には、「明治35年(1902)には篠島青年奉仕会と改め、その後また規約を改訂して篠島青年団といった。篠島唯一の社会奉仕団体であり、反面修養団体であった」と記されており、明治末期頃には「青年団」という名称がようやく定着したことがわかる。さらに役員や加入年齢などに関して、「経験の豊富な年配の実力者が団長に選ばれて、永くその職に留まり諸事に精通していて睨みも利いた。団長の下には字によって区切られた四分団があり、分団長が支配した。島の学校を卒業して若

い衆宿を定め○○組と名乗る頃には、青年団に入団することが義務付けられていた」[7]。また「入団すると宿の所在する地区の分団に所属し、<小若い衆>と呼ばれてきびしい躾を受けながら、先ず使い走りをつとめた。(中略) 次の年に入団し分団に所属する組があると、<中若い衆>に昇格し更に3～4年すると<中老>と呼ばれた」と記されており[8]、かつては四分団があったことや、青年団の分団と宿が密接にかかわっており、若者は自分の家ではなく、宿の所在地によってどの分団に加入するかが決められていたことなどがうかがえる。隣島の日間賀島においても若い衆組に入ると同時期にネドコ(寝宿)に泊まるという慣行があったことと、小若い衆・中達・中老といった若い衆仲間の存在も報告されている[9]。

戦後も、男子は中学校を卒業すると大半の者は島に残って漁師になったので、この者たちは全員が青年団に加入した。近年では、青年団の役員は21歳の者が務めることになっており、それが済むと青年団を脱退するという。そして23，4歳になると、次は消防団に加入する。今日では若者の数が減ったために、全員が消防団に加入するが、かつては年長者によって選抜が行われ、選ばれたものだけが消防団に加入していたという。なお消防団は31歳で抜けることになっている。

4. 篠島の若者と宿

1) 宿と朋輩(ホーバイ)

篠島は、若者が「宿」と呼ばれる同年配の家に寝泊まりする慣行を

---

7) 篠島刊行委員会、『知多半島篠島 補遺』、名古屋：篠島刊行委員会、1987、p. 5.
8) 上掲書、p. 6.
9) 瀬川清子、『日間賀島・見島民俗誌』、東京：未来社、1975、pp. 48-54.

現在にも残している島として注目される。

同じ宿で寝泊まりする仲間をホーバイ、あるいはツレと称し、生涯兄弟同然に親しくつき合う。仲間同士で寝泊まりする家を宿のほかに、寝宿・宿組とも称する。宿の名称に「○○組」と付けることから、「組」という言い方もある。宿の呼び名にはその家の屋号や船名が用いられることが多い。たとえば「中七組」・「赤万組」・「松進組」などと呼ばれた[10]。

宿は学校時代の仲間同士が、そのまま組に移行するため、宿組は同学年の友人で形成されるが、必ずしも同じ年齢とは限らず、時には遊び仲間の中で1～2歳上の学年の組に誘われたり、年下の組に入ったりして、やや年齢に幅がある場合も見られる。現在でも組の内部の合意があれば、年齢の異なるメンバーの加入はタブーではない。ホーバイ内であればだれが兄、だれが弟という序列はなく、全員が平等な関係になる。

宿が決まると、子供たちは家から自分の布団と枕を持参して宿に運ぶ。それ以降は毎晩宿で寝泊まりすることになる。かつてはほとんどの若者が島に残って漁師になったため、普段は漁から帰ると自宅で晩御飯を済ませ、風呂に入ってから宿に出向いた。宿を組む人数は、おおむね5人から15人程度であるが、平均4～5人から7～8人というのが標準であるといわれている。稀ではあるが、中には「ちんや組」のように16人という例もあった。しかし、この16人中、常時島に在住しているものは7人ということである。また、過去には1947年生まれの人たちで構成された組は24人という例もあった[11]。仲間の数が多い場合は、喧嘩をしたり話が合わなかったりして、途中で分裂して新たに宿を組んだり、他の宿に後から加えてもらう例もあっ

10)『愛知県史』、p. 227.
11)『愛知県史民俗調査報告書』1 篠島、p. 101.

た。また、宿で悪いいたずらをして宿親から追い出され、仕方なく途中で宿を変えたという例もある。このように、個人が何らかの事情で、途中で宿を変えるのは一般的に許容されていたことと、宿元を替えること自体も事例こそ少ないが、全くのタブーではなかったことがうかがえる。

朋輩同士の関係は、先述したように極めてフラットなものとなっており、年齢の差があったとしても、組内は全員が平等であり、組長といった形のリーダーはいないという。たとえ宿親の実子が、実家の宿子であっても、それを理由にリーダー的な地位に就くということも一切見られない。現実にはいろいろな行事においてリーダーシップを取る者は存在するようであるし、組の中心的役割を担う者は自然発生的に役割分担されるが、宿の構成員自信としては、あくまでも平等という認識で貫かれている。

ここで一つ注目しておきたいのは、宿を組むことが必ずしも島の若者の義務的な慣行ではないことである。当然、今も昔も宿に入らない者も、宿のない者も存在するという。かつては長男は島に残り、次男以下は中学校を卒業すると島を出ていったため、宿に入るのは跡取りでもある長男がその対象となっていた。もし、将来島に残るつもりのない者は、中学を卒業する時点で最初から宿に加入しないという。しかし、依然として島出身の多くの人が宿を組むことを当然のように受け止めており、仮に子供自身が宿組に関心を持たなくとも、親が積極的に宿に入れたがる風潮が見られる。もう一つは、宿組へ加入が島での在住を絶対条件としていないことである。先に触れた「ちんや組」でも半分以上が島外に出ており、1975年生まれを中心とする「第6松進組」の場合は、宿組10人中、島在住者は3人だけという状況である。つまり、もともと宿組であったメンバーが、進学や就職のため、島を離れていても宿がある限り島との紐帯が維持されるという受け止め方がなされている。これは逆に、宿を離れた時

点で気持ちの上で他人になることをも意味するものである。

2) 兄組と弟組

子供の数が多かった戦前は、同じ年に5組、6組以上の宿が作られたこともあったといわれる。たとえば1940年(昭和15年)生まれの者が宿に入る頃は、だいたい東・中・西・南の区ごとに四つの宿ができたという。しかしそれぞれの宿に集まる若者は自然発生的に集まってホーバイを構成するために、必ずしも地縁的な結びつきがあるとは限らない。たとえば東区に居住する若者が中区の宿へ寝泊まりに行くという例は多かったようだ。その場合でも、たとえば祭りには宿がある中区のメンバーと参加することになっていた。すなわち若者たちは自分が居住する区ではなく、あくまでも宿のある区の構成員として扱われたのである。

また、一つの区にはほぼ毎年一つの宿ができるので、代々年齢差のある宿が併存する状況となる。特に青年団の命令は各区を単位として伝達されており、また正月の祭りも区を単位として行われるので、必然的に先輩の年長の宿の者が後輩の年少の宿の者を指導することになる。このような年長の組を兄組、年少の宿を弟組と称し、一種の兄弟分関係が形成されていた。若者たちは宿親の命令には必ず従ったのと同様に、兄組には絶対服従であったという。

しかし、このような兄組と弟組の上下関係も、おおむね二十歳を過ぎる頃にはあまり意識されなくなるといわれるように、宿親と宿子の関係と同様に、必ずしも厳格な上下の関係性ではなかったことがうかがえる。

ところで、近年は子供の数が減り、区ごとに宿が作られることもなくなったので、祭りも青年団全体で行っているのが現状である。

3) 宿親と宿子

自家を宿として提供してくれる、家の主人をヤドオヤ(宿親)と称し、宿の内部では、オヤジ・オヤジサンなどと呼んでいる。一方、宿組のメンバーを、宿親からはヤドコ(宿子)・ヤノコと表現する。また、宿子同士では、すでに述べたようにホーバイ(朋輩)・ツレが用いられる。

かつては子供たちが自主的に宿を決めていたが、近年では子供の親が頼みに行くことが多い。宿を引き受けてくれるのは、おおむね二階建ての大きな家や空き部屋のあるような家で、経済的にも比較的に豊かな家である。宿での費用は基本的には子供たちの自己負担であるが、最初に宿に入る日は、宿親主催の祝い(宴会)を行うなど[12]、実際には宿を引き受けた家は相当の負担を強いられた。宿親は自家に寝泊りする子供たちを実の子と同じように指導し、また子供たちは宿親を実の親同然に接する。本当の親のいうことには逆らっても宿親の命令には従うといわれている。宿親の指導に従わない場合には、宿からの追放という制裁措置も時には行なわれたが、その対象となった宿子にとっては非常に不名誉なことであり、宿のつき合いができない者は朋輩を失い、島社会の生活において非常に肩身狭い思いをしなくてはならない。この制裁を怖れる気持ちが宿親の権威の後ろ盾となっていることと推測される。

篠島では、宿親を務める家は、おおむね一定以上の財産を有する、いわゆる網元であることが多かったが[13]、必ずしもそうであるとは限らない。網本と網子の関係が直接に宿親と宿子の関係につな

---

12) 文化庁文化財保護部編、『民俗資料選集』7　年齢階梯制Ⅰ、東京：国土地理協会、1979、p. 211.

13) 船舶や漁網を所有し、多数の漁夫(網子)を雇用して網漁業を営む者をいい、経済的背景をもとに網子との間では、親方・子方の依存的な関係になる場合が多い。

がることはなく、その意味では篠島の宿が、もっぱら漁業という生業における親方・子方関係に依拠して設けられたものではないことがうかがえる[14]。篠島の宿は、いうならば宿子である若者たちの主導によって組織された制度であり、そこにおける宿親は若者たちの教育を託されているが、それは必ずしも絶対的ではない。それだけに、実際の宿親と宿子の関係は、厳密な上下関係としての秩序が要求されるものではなく、比較的柔軟性を帯びているように思われる。

宿親を選ぶ際の条件として挙げられるのは、まず家の広さである。宿子を受け入れるためには部屋を一室提供できる余裕のある家でなければならない。そのため、基本的には二階建ての家に依頼することが一般的である。これと関連して、次に挙げられるのが宿親の経済的な余裕である。宿を世話するには何かと物入りであること、それに対しての制度化された謝礼などは一切ないことを考えると、宿親を受ける家の条件として経済的な側面を考えざるを得ない。これらに加えて、次に宿親の人望を挙げることができよう。きちんと宿子をわが子のように叱ることができること、夫婦共に健在で世話好きであること、集まりやすい雰囲気であることなどの条件が付帯的に重なって、宿が決められていく。これらの諸条件を満たすことの可能な家は、狭い島社会で当然限られており、親方的な地位にある家が選ばれたり、一度宿親を引き受けると、代々同じような家が宿になるケースが多いことがわかる。また、兄弟のいる家で２組の宿の宿親を引き受けたという家の例もある。この場合は、宿子の集まる部屋はそれぞれ用意されるため、やはり、かなり住宅の余裕のある家が強く求められるわけである。

---

14)『愛知県史』、p. 227.

4) 宿の生活と娘遊び

宿屋の生活は宿子たちの結婚を機に解散を迎えるのが一般的である。島に残る若者たちは、特別な用事がない限り、ほとんど島外に出ることはない。若者たちは、どのようにして自分たちの伴侶を見つけるだろうか。

若者たちは、例外なく毎晩宿で寝泊まりをする。もし宿に行かず家にいたら、親から強く叱られるともいわれている。宿では特別な仕事や義務があるわけではなく、ホーバイ同士で語り合ったり、将棋などのゲームに講じたりと、気ままに過ごすことができた。戦前は、冬ならホーバイが連れ立って夜学に出かけたり、夜警の仕事をした。

しかし宿での営みとして、なにより多くの若者たちの関心を集めたのは娘遊びだった。大正時代から日本髪に使うイタコ絞りが島に伝わり、それ以降はイタコ絞りが島外に働きに出ない娘たちの夜なべ仕事として定着した。イタコ絞りは各個人で行うが、みなで歌を歌いながらやったほうが面白かったので、ツレ同士でどこかの家に集まる。集まる娘の数は多ければ7、8人ぐらいで、同級生や一つくらい年が離れている場合もあった[15]。そこへ若者たちが連れ立って遊びに出かけた。多くの場合、3，4人の宿子が連れ立って娘のいる家に遊びに行く。娘の家では若者たちがやってくると、親は席を外すことが慣例とされていた。座ってみんなで話をし、仲が良くなった二人がいれば気をきかせて残しておいて、他の仲間はよそへ行ってしまう。若者たちは篠島中を一晩で3～4軒くらいはまわったという。また、娘と若者たちがいるところへ、別の若者たちが来ると、先に来ていた者は席を譲り、違う娘の家へ移動したという。

---

15) 八木透・山崎裕子・服部誠　編、『日本の民俗』7 男と女の民俗誌、東京：吉川弘文館、2008、p. 212.

このような集団での娘遊びの中で、一人の若者が特定の娘に恋をすると、まずホーバイに相談して協力を依頼する。かつては一人の娘を複数の宿子たちが奪い合い、浜辺で決闘をして決めたこともあったという。同じく三重県鳥羽市答志島でも娘遊びが行われ、時には宿に娘を連れてくることもあり、仲間が宿にいなければ娘を泊めることもできたという[16]。かつて関敬吾は、若者宿の目的を「夜遊び」であるといったように[17]、この島ではほとんどの者が娘遊びを契機として生涯の伴侶を見つけていったといえよう。

篠島では、男女の気が合って恋愛関係になることをナジミになるといった。ナジミの者同士が肉体関係を持つことは非難されるべきではなく、そのため子供ができることもあったが、そうするとたいていは結婚することになった。男子が娘遊びの交際期間を経て、結婚するのは20～25歳くらいであり、女子の場合は10代での結婚も多かった。島の娘遊びは狭い島内で行われるため、若者の行動は周囲にすべてわかってしまう。ナジミとなれば周囲もそれと認めたが、容易に相手を変えるようなことがあれば島の中では冷たい視線を招くことになる。ここでは、恋愛は単に個人の問題ではない。若者仲間や共同体もそれを応援する反面、不道徳な行為に対しては一定の制裁が加えられていたのであり、「自由恋愛」というものではなく、かなり制度化された「恋愛慣行」といってもよいであろう。

5) ギリゴトとヤドカンジョウ

近年では、ホーバイたちは就職すると離れ離れになるので、ギリゴト(義理事)といわれる、冠婚葬祭があると、全員が集まって一緒に参

16) 上掲書、p. 213.

17) 関敬吾、「年齢集団」『覆刻　日本民俗学大系』3　社会と民俗Ⅰ、東京：平凡社、1976、p. 160.

加することがなかなかできないことが多い。その場合は島にいるホーバイやヤドオヤに祝儀、不祝儀を立て替えてもらう例が多いようだ。ギリゴトの金額などは島に残っている者で相談して決めているという。宿によって異なるが、ホーバイで積み立てを行い、宿親に通帳の管理を依頼している宿組もいる。盆と正月には必ず全員が集まるので、ギリゴトの清算を行う。これをヤドカンジョウ(宿勘定)という。

出費に関わる主な項目は、結婚の祝儀、葬式の香典をはじめ、見舞金、盆や正月など全員が集まった時の飲食費、宿親への贈り物、各種の積み立て金である。特に見舞いや不祝儀に関しては、仲間の祖父母や両親、妻など、広範囲に対して配慮がなされている[18]。また、宿勘定の帳面には、税金の立て替えの記載も見られ、宿のつながりが、時に経済的相互扶助の機能も有していたことがうかがえる。これは前述したように、経済的に余裕のあることが、宿親の基本的条件の一つであることを物語っている。

6) 厄年と宿

篠島では、数え24歳と42歳の男の厄年の行事はかなり重要視されている。特に42歳の厄年の厄払いは盛大に行う慣習がある。42歳には前厄・本厄・後厄の3年間、2月の初午の日に南知多町の岩屋寺へ参詣することが慣例とされている。また正月の祭礼における大名行列では、42歳の男たちが揃いの紋付を着て参加し、祭りにおける中心的な役割を担う。祭りの後には、厄年の者が夫婦そろって島中の社寺や祠堂を詣でて回るという[19]。これらの厄年の諸行事の単位となるのは、基本的に同年齢の者で組織されている宿のホーバイたち

18)『愛知県史民俗調査報告書』1 篠島、pp. 102-103.
19)『愛知県史民俗調査報告書』1 篠島、pp. 103-104.

である。ただ、正月の祭礼はともかくとして、その他の厄年の行事が宿を単位として行われるようになったのは戦後のことであり、それ以前はそれぞれの家族単位で行われていたという。なお近年では、正月の祭礼が済むと、ホーバイたちが夫婦揃って、ハワイやグアムなどへの海外旅行に出かけるという例が多く見られるようになってきた。組の世代の例では、すでに25歳の厄落としとして海外旅行に出かけているケースもある。これは厄年の行事において、本来の厄落としとしての意味が忘れられ、人生の節目として個人的な利益を優先する発想に変化してきたことを物語っているといえよう。

5．おわりに

以上、篠島における社会組織と若者宿をめぐる民俗慣行について述べてきた。ここでは若者が何故に家族から離れて、宿という特定の家に泊まらないといけないのか。この宿が島の社会生活において、いかなる関係をもつかという点について、若干考察を行う。

海に囲まれた島社会は、陸地の農漁村のように自由に移動することができない。どこへ行くにしても海を渡らなければならない。今は高速船などで陸との距離は心理的に縮まったとはいえ、孤立した島の生活は依然として変わらない。中学を卒業して島に残る若者は、これから家業や仕事を覚え、一人前として成長していかねばならない。それは狭い島内で毎日繰り返される日常的な営みを意味するものでもある。退屈しても町にあるような娯楽施設はそもそもない。そういう環境の中で、島の若者たちにとっていちばんの楽しみは、仕事を終えて気の合った友達と行き来しながら遊ぶことであった。たとえば複数の友達がいると、毎晩のように誰かの家を訪ねたり、あるいは自分の家に来てもらって遊ぶことになる。しかし親に

とって子供たちが夜遅くまで遊んだりすると、翌日の仕事に支障が生じると心配することもあるし、遊びにきた友達もその家の家族に気をつかわねばならない。このような状況が、自然と若者たちがどちらの家にも迷惑がかからないような第三の溜り場を必要としたことは十分考えられる。まさに宿はこうした若者たちの願望に沿って生まれた制度として理解できよう。もう一つ考えられることは親子の関係である。跡取りとして島に生きる若者のほとんどは家業に従事している。一日中、大部分を親と一緒に過ごしながら家業を手伝ったり、学んだりする。若者の多くは親を通して漁師なることを教わる。しかし家業以外の面においては、実親として息子の躾や悩みの相談に乗るには限界がある。現代の子供も親にはいえないことも、友人や他人にはいえるといった場合はしばしばある。宿では仲間と相談ができ、また宿親にアドバイスを受けることも多い。たとえば娘遊びを通して好きな娘ができると、まずは仲間の宿子に打ち明けて助けてもらうこともあれば、結婚の相手が決まると、実親より宿親にまっさきに報告するという。篠島や周辺の島では、宿親が宿子の結婚に仲人を務めることはよく知られている。このように宿子の絆は兄弟以上であり、宿親を実親のように慕うというのはこうした事実を反映していることにほかならない。宿は、島に生きる若者たちの自律性と協調性を養い、生涯のホーバイを得ることで、助け合いと結束力を強めるシステムとして機能してきたといえるだろう。

最後に、若者宿の現代的な意義について述べよう。民俗社会において若者たちはさまざまな性格を有する同性の仲間を結成し、それらの「群れ」の中で集団生活の基本や大人の男としての常識を学んだのである。さらに異性へのまなざしやつきあい方を学び、体得するのも、同性の仲間や宿親からであった。現代と比べて、集団性や人々との共生がはるかに重要であった民俗社会において、「群れ」の中で自己を見つめ、他者を考える経験を持つことは想像以上に大き

な意味があっただろう。さらに、子供から大人への過渡期にある男たちを教育するシステムが、学校や家庭以外にも数多く存在したことに注目すべきである。

集団性の欠如、引きこもりや不登校、いじめによる自殺、いくつになっても親離れできない若者たち、そしてその親たち。今もいじめを原因とする小中学生の自殺が頻発する。いじめによって自殺に走るのは圧倒的に男子が多いといわれている。伊藤公雄によれば、いじめによって自殺に追い込まれた子供の8割強が男の子だという。ところが「いじめ電話相談」に電話をかけてくるのは圧倒的に女の子が多いそうだ[20]。にもかかわらず、自殺にまで至る例は女の子より男の子が多いのはなぜだろうか。ここにも、「男であること」の問題が潜んでいそうである。現代社会の子供や若者たちの中にはびこる種々の社会問題を解決に導くヒントの多くが、民俗社会の中に存在する[21]、という八木透の指摘は示唆するところが多い。

参考文献

1. 基本 資料

愛知県教育委員会編、『三河湾・伊勢湾漁労習俗緊急調査報告』、第Ⅰ集、愛知県教育委員会、1968.

愛知県教育委員会編、『三河湾・伊勢湾漁労習俗緊急調査報告』、第Ⅱ集、愛知県教育委員会、1969.

愛知県史編さん専門委員会民俗部会編、『愛知県史民俗調査報告書1篠島』愛知県総務部県史編さん室、1998.

---

20) 伊藤公雄、『男性学入門』、東京：作品社、1996、pp. 50-85.

21) 八木徹 外2人編、『日本の民俗7 男と女の民俗誌』吉川広文館、p. 58.

愛知県史編さん委員会編、『愛知県史』別冊 総説民俗1、愛知県、2011.

2. 論文

河上一雄、「成年式と若者組」『日本民俗学講座』2(社会伝承)、朝倉書店、1976、pp. 276-289.
関敬吾、「年齢集団」『覆刻 日本民俗学大系』3(社会と民俗Ⅰ)、平凡社、1976、pp. 127-174.
平山和彦、「年齢と性の秩序」『日本民俗学大系』8(村と村人)、小学館、1984、pp. 151-192.

3. 単行本

伊藤公雄、『男性学入門』、東京:作品社、1996.
岩本通弥 編、『覚悟と生き方』筑摩書房、1999.
瀬川清子、『日間賀島・見島民俗誌』、未来社、1975.
瀬川清子、『若者と娘をめぐる民俗』、未来社、1972.
篠島刊行委員会、『知多半島篠島 補遺』、篠島刊行委員会、1987.
新谷尚紀 外2人編、『暮らしの中の民俗学』3(一生)、吉川弘文館、2003.
福田アジオ他編、『精選日本民俗学辞典』、吉川弘文館、2006.
文化庁文化財保護部 編、『民俗資料選集』7(年齢階梯制Ⅰ)、国道地理協会、1979.
八木徹 外2人編、『日本の民俗7 男と女の民俗誌』吉川広文館、2008.
和歌森太郎、『和歌森太郎著作集』12、弘文堂、1982.

Wakamono－Yado and Traditional Practice in the Shinojima Island

Choi, Sam-Chang

This paper studies the traditional practice “wakamono-yado” of the Shinojima Island based on fieldwork. The friend who graduated from the junior high school makes a group, and has one room of the specific home of an island offered, and it stays. This is called “wakamono-yado.”

The member of “yado” will be called “yadoko” and he will associate as “hobai” which is a relation like a whole life brother.

Moreover, the person of a house who offered “yado” is called “yado-oya” and it follows like real parents. “yado-oya” helps growth of “yadoko” through a living guidance, consultation, etc. “yado-oya” serves as a gratuitous volunteer fundamentally.

The first pleasure of “yadoko” is visiting daughters’ house at night. A its companion for life is found by it. This is called “musume-asobi.” “yado” is dispersed as at the time of marriage of “yadoko.”

Even if it disperses “yado”, a relation with “yado-oya” and the relation of “hobai” continue throughout life. It is functioning as a system indispensable to the society of the island which needs mutual help.

When considering youth problems, such as today’s “ijime”, school violence, and suicide, the custom of “wakamono-yado” has many which are suggested.

Key words : wakamono, yado, yadoko, yado-oya, hobai, musume-asobi

최삼창
소속: 京都府立大学 文学部
주소: 京都府 京都市 下鴨半木町 1-5
전화번호: 81-075-703-5117
E-mail: kyotochoi@yahoo.co.jp

이 논문은 2014년 3월 17일 투고하여
2014년 4월 7일까지 심사 완료하여
2014년 4월 30일 게재 확정함